

「住民ディレクター番組」の有機的循環プロセス

—メディアにおける「かたち」「なかみ」「あいだ」—

古川柳子

一．はじめに

デジタル技術が普及し、活字、映像、音声などすべての表現形態を同一信号に変換して一つのプラットフォームの載せることが可能となる中、新聞、出版、放送、通信というような媒体技術によるカテゴリー分類や、メディアのプロを「送り手」、一般の人々を「受け手」と固定的に切り分ける境界線が現実にあわなくなってきた。媒体や役割の境界線の中でメディア企業が棲み分けてきた二〇世紀のメディア環境は流動化し始め、メディア企業が一方的に大衆に情報発信するという「マス・コミュニケーション」の定義も再考を迫られている。

だが一方で、その境界線を越境し、媒体間や「マス」と「パーソナル」、「プロ」と「アマ」を有機的に繋ぐメディアの形態が編み上がってきているかという点、それはなかなか見えてこない。「誰もが世界を相手に発信できる」とされるインターネット空間での発信の氾濫は、知りたい情報だけに断片的、刹那的にアクセスする傾向やクラストライズを招き、「マスゴミ」という敵意あるジャーゴンに現れるような亀裂も一部には見られる。媒介の変化によって出来事の発生の仕方は変わり始めているものの、多くの人々が関わりながら建設的に事を積み

上げる方向に進んでいるとはいえない。様々な可能性を潜在的に内包しているメディア環境にありながら、構成する諸要素が有機的に繋がらないために、ネガティブな面が問題として浮上しているのが現状だといえよう。

このメディア環境の変化は、メディア研究の領域においても新たな方法論の模索を要求している。マクルーハンが「メディア」と「コンテンツ」を意識化して以来、メディアの「かたち」に焦点をあてるメディア論的アプローチと、表現の「なかみ」を問題とする内容分析は別の方法論と位置付けられがちだ。「メディア」という枠組みへの覚醒が極めて重要であることは大前提である。だが、表現がどういった媒体技術や運用体制によって成立し、受け手との間にいかなるインターフェイスを成立させているかというメディアの「かたち」構造」と、その枠組みの中で表現されている「なかみ」内容」、は相互にその在り様を規定しあっていることも見落せない。この「かたち」と「なかみ」は無媒介的に直接関係しあうのではなく、「あいだ」関係」ともいえる要素に大きく左右されている。それは、企画・編成・取材・発信などの運用が誰によってどんな関係性の中で行われているのか、発信・受信の循環の中でどのようなテーマ選択やコミュニケーションが発生しているか、というような表現を創造、再生産する様々な階層に

おける関係性である。既存マス・メディアにおけるこのような要素は基本的に産業システムの中に閉じている上、時間軸にそった経過観察を必要とするため可視化しにくい領域だった。だが、各メディアの「かたち」が比較的固定していた二〇世紀のメディア環境から、メディアの構成諸要因が流動化する環境へと移行する中、メディアの枠組み自体を静的な構造物としてではなく、生成の時間軸と変化のプロセスを持つ動的なシステムと見る視点が不可欠となってきた。「かたち」と「なかみ」をバラバラに考察するのではなく、その「あいだ」に発生している要素に着目する眼力を鍛え、境界や亀裂を有機的に架橋していくコミュニケーションを生み出す方法論を獲得していくことは、非常に大きな課題である。

私が福岡県の東峰村の村営テレビ局で、昨年一年間放送された『大河ドラマ追走番組・官兵衛で國創り』という風変わりな試みを一年間「追走」しようと思いついたのも、自明のこととなっているメディアの境界線を越えて、新しい繋がり方を創り出そうとする模索をそこに見たからだ。山間地に位置する人口約二三〇〇人の東峰村に総務省の助成金を活用した光ケーブルが整備され、村営の東峰テレビが開局したのは二〇一〇年一月。光ケーブル敷設はインターネット整備が遅れていた村のデジタル・ディバイド解消と、地上波テレビ完全デジタル化への対応のためだった。その際、デジタル地上波、BS、CS放送配信の他に、空き帯域を使って自主放送チャンネルが設けられた。「村民みんなで創るテレビ」をキャッチフレーズに、東峰テレビは開局以来村民スタッフが番組制作に関わる放送形態を確立してきたのである。その背景にはこの東峰テレビの局長である岸本晃が二〇〇年にわたって「住民ディレクター活動」を推進してきた背景があるが、詳細については後ほど説明しよう。

『大河ドラマ追走番組・官兵衛で國創り』はNHKの大河ドラマ『軍師官兵衛』の放送直後に毎週放送された一五分の生番組だったが、この小さな番組は、限られた地域内を想定したいわゆる地域メディア

アのコンテンツとは大きく違っていた。「毎週大河ドラマを追いかけながら地域の歴史を見直し、人と人、地域と地域を繋ぐ番組づくりを目指す」という番組コンセプトのもと、インターネットを活用して全国各地の住民ディレクターを生中継で結びながら番組は進められ、二月の最終回には全国五〇地域以上を繋いで『官兵衛で國創り二六時間テレビ』を敢行することになる。調べてみれば、マスメディアの「ネタ」や「型」を借り、インターネットの双方向性も活用しながら、既存メディアの枠組みには収まらないモデルが一年間かけて生成されていったのである。東京在住の私は、毎週YouTubeで東峰村の放送を視聴し（同時間帯で見られない時はYouTubeのアーカイブで視聴）、全五〇回の内容の流れを分析すると共に、二回の東峰村現地調査と、岸本局長や関係スタッフへの聞き取りを三回ほど行い、その諸要因を検討してきた。この小さな村のテレビ局の挑戦が何を実現し、それがいかにして可能になったのか。これを一つの事例として、既存メディアの境界を架橋するメディア・デザインの可能性について考察してみようというのがこの小論の目的である。

今日「メディア・デザイン」という言葉は、メディアのインターフェイスやコンテンツ、あるいはコミュニケーションを発生させる空間やオブジェクトなど、様々な対象に対しそれぞれの文脈で使われているが、本稿ではこの言葉に「情報や意味を媒介する媒体と、その媒介の在り様を、企画、設計、表現する行為」という広い射程を持たせている。だが同時に、動的な相互関係の中で発生するメディア・コミュニケーションにおける「媒介の在り様」に対して、どこまでデザインという人為が可能なのかという、個々のケースに宿る根源的な課題にも意識的でありたい。

本論文の構成としては、事例の検討に入る前に、二章でまずマスメディアの形成過程でメディア境界線が生まれていった分化のプロセスと、それを越境する試みの系譜を確認し、三章で『官兵衛で國創り』事例の概要とそれを実現してきた諸要因を分析する。四章ではこのモ

デルが持つ画期性について、メディアの「かたち」「なかみ」「あいだ」の諸相で考察した上で、五章のメディアの在り様を有機的システムとしてデザインしていく視座の提起につなげていく。

二．メディアの境界線の発生と越境

「マス・コミュニケーション」という社会的コミュニケーション概念は、一九世紀末から技術領域と社会領域において同時進行した新しい動きの中で生成され、二〇世紀に定着してきた^④。当時、次々と登場した「ニューメディア」は社会の出来事と日常生活の間の距離と時間を急速に縮め、聴覚的、視覚的によりリアリティのある表現を可能にした。今日、メディアの基本的分類となっている媒体技術ごとの切り分け——通信・電話・映画・ラジオ・テレビ等——は、新しいメディア技術が登場するたびに、それを活用する表現や発信の形式が生み出されてきた結果である。産業革命と表裏の関係で誘発された消費革命は、「大衆」をスポンサーとするマスメディアの産業化を力強く後押しし、大規模な設備投資を必要とする装置産業へと成長させた。そしてこの過程で、メディア組織の内側で情報を制作し発信を行う少数の人々と、外側でそれを受容する「大衆」が分化し、「送り手—受け手」の固定化が「不特定多数の人々への一方向的な情報提供」する「マス・メディア」の基本要素となっていた。

メディアの在り様には本来はもっと多様な可能的様態があり、今日のメディア技術の活用のみならず、その中から社会的に構成されてものであることは様々に指摘されてきた。たとえば、ラジオは一般大衆への「放送メディア」となる以前、アマチュア無線家たちが彼方に離れた人々と互いに通信しあうメディアとして愛好されていた^⑤。ラジオを双方向メディアとして活用する可能性をブレヒトが論じていることは良く知られている^⑥。だが、そのような技術的可能性が多様に活用されず、今日の在り方に集約していったのはなぜなのかということも考

えてみる必要がある。

それぞれのメディア技術が一般に普及し産業化してきた歴史を振り返ってみると、ある共通のパターンが見えてくる。まず、新しい技術への関心や知識を持つ技術者、研究者、芸術家などが、その活用の可能性を求めて試行錯誤を繰り返す段階がある。次に、一般の人々が容易に利用できるような技術的な難しさを肩代わりするサービスが創意工夫される段階がある。この時、媒体の形式と、その運用を支える経済との兼ね合いの中で、メディアの表現の「型」フォーマット」ともいえるものが成立し、受け手との間のインタラフェイスとして定着し始める。たとえば近代新聞においては「紙面」というモザイク状に情報を配置するスタイルであり、放送においては「番組」という時間をレイアウトする枠組みである^⑦。インターネットの短い歴史においても、コンピューター言語でプログラムできる者たちがこの技術を独占的に活用できた時代から、「掲示板」「検索サイト」「ブログ」「動画投稿サイト」「SNS」など、利用のための「型」フォーマット」が開発され、技術に対するハードルが低くなるに従って、一般の人々の活用は急速に広がっていった。この移行はそのメディアにおける表現・発信の継続性を支える諸機能が制度化し、産業としてのシステムが構築されていく過程と併走する。メディア表現の「型」は一般の人々がその便利さに馴染むほどに社会に普及するが、便利に利用できればそれだけという受動的な姿勢が大勢をしめるに従ってメディアはブラックボックス化し、受け手の関心ももっぱら「内容」に集中するようになるとメディアの表現の「枠組」に関心を持つ者は産業側の人間だけになっていく。「送り手—受け手」が固定化してきたプロセスには、このような受け手の要因も含まれていることも無視できない。

マスメディアによる情報発信の独占に対する異議申し立ては、一九六〇年代ころから世界各地で同時多発的に発生した。欧米諸国では市民の知る権利（知らされる自由、知らせる自由）や市民がメディアにアクセスする権利、すなわち「パブリック・アクセス」の概念が叫ば

れ、CATVやコミュニティラジオなどにおけるパブリック・アクセス・チャンネルの制度化へと繋がっていった。日本においては、堀部政男らによってマス・メディアへのアクセス権問題が提起され始めるのは一九七〇年代であるが、米国のパブリック・アクセス制度が本格的に紹介されたのは一九九〇年代に入ってからだ。ビデオカメラの小型化に伴いビデオジャーナリストの活動なども注目され、商業的、職業的なメディアに対するオルタナティブな可能性として、一般の人々の発信による「市民ジャーナリズム」「市民メディア」という領域が立ち上がっていった。そんな中、日本における「パブリック・アクセスの原型」として「再発見」されていったのが初期のCATVの自主放送だった。市民の発信活動という系譜を遡れば同人誌や綴り方運動、ハミリ映画など様々な形態があったが、この時期、主に注目されたのは社会的に大きな影響力を持ちながら一般の人々がアクセスすることが最も難しかったテレビだった。

日本最初のCATVにおける自主放送は岐阜県の郡上八幡で始まった。地上波テレビの放送開始から一〇年経った一九六三年のことだ。地上波が届かない山間地のため共働視聴組合がケーブル回線を引き、その空きチャンネルで町民がテレビ番組を制作、放送した最初のケースである。その発案者は郡上八幡で印刷会社を経営していた菅野一郎。町民劇団「ともしび」の立ち上げなどにも関わる、町の文化活動に熱心な人物だった。「大型テレビ（地上波テレビのこと）にはない生きながら回覧板、ローカルニュースをやるう」という菅野の呼びかけに、町の電気屋、写真屋、菓子屋、教師、役場職員、郵便局員、無線マニア、学生などが集まり、馬小屋を改造したスタジオで町民のボランティアによる自主放送が三年間行われた。ニュースは中日新聞の地元記者に依頼し、町議会や町内会なども中継。テレビ婦人学級や電話クイズなどでは電話を使って双方向性を工夫した番組創りも行われた。まさに町民自身がテレビ放送をその枠組みから作り上げた事例だったといっている。この郡上八幡を皮切りに和歌山県新宮、静岡県下田、京都府

福知山などで次々と自主放送が始まっていく。下田CATVの自主放送の創始者、竹河信義の「地域社会の有線テレビ放送は既存のテレビ放送と比べようもないほど幼稚なものであることはいうまでもないがCATVの視聴者は、自ら放送に参加し、誰もが出演し、代わる代わる語り訴えることのできる新しい媒体であり、固有の特性もっているものである」という言葉には、地域メディアの自負が明確に表明されていた。

だが、CATVの「自主放送」を商業マスメディアに対抗するオルタナティブ・メディアと単純に位置づける見方には少々保留が必要だ。初期CATVの自主放送が周縁地域に多いのは、基本的に地上波テレビの難視聴対策としてケーブルが敷設されたからだ。郡上八幡TVの自主放送も、中継局が完成し名古屋のテレビ電波が直接受信できるようになると加入者が減り、三年目には終了している。現在も自主放送を続けている静岡県の下田CATVは、テレビ受信機を売るために街の電気屋たちが共同でケーブル回線を引いたのが始まりだった。下田から伊豆半島の東側の地域では静岡局のテレビ電波が受信できないため、今もCATV局が東京局の地域外再送信を行っている。自主放送を行っているCATVにとっても経済的な支柱が地上波テレビの再送信であることは否めない。「パブリック・アクセスの原型」が、マスメディアと別次元の空間で始まったものでないことは確認しておく必要がある。

一九八〇年代後半、放送・通信衛星打ち上げ、光ファイバー通信開発などの新しい技術的動きや、電電公社からNTTへの移行に伴う通信事業体制の変更などを背景に「ニューメディア・ブーム」が押し寄せた。この動きを政府や産業界が主導してユートピア的未来像を盛り上げた単なるブームと総括する向きもあるが、市民発信の気運を押し上げるひとつの要因になったことも確かである。都市型CATVでの自主放送も次々と登場した。一九八九年に放送を始めた鳥取県米子市の中海TVは、一九九二年に市民の制作ビデオをそのまま放送する

「市民チャンネル」を開始し、これが日本最初のパブリック・アクセス・チャンネルとされる。一九九〇年代後半から二〇〇〇年代にかけてはインターネットを媒体とする「市民メディア」が多数登場し、二〇〇四年以降は、「市民メディア全国交流会」が毎年一回行われるようになった。インターネットがない時代には、一般市民が社会的に発信できる方法は限られており、CATVやコミュニティFMなど発信の舞台を確保すること自体が「パブリック・アクセス」の重要な課題だった。だが、社会的コミュニケーションにアクセスするだけなら誰にでも可能な環境においては、「パブリック・アクセス」の意味づけも問い返される段階に入っているといえるだろう。

媒体技術の区分、送り手受け手の区分、送り手の属性の区分。メディアの在り様を枠づけてきたこのような境界線の中で、これまで各メディアのアイデンティティは成立してきた。しかし、地上波テレビの半数がCATV経由で視聴され、マスメディアや市民メディアがインターネットを活用し、一個人が世界に発信をする状況が日常化してくると、既存の境界線の意味ははことごとく無効になっていく。だが、それぞれのカテゴリーに閉じてきたシステムは、そう簡単には開かない。問題は技術的要因ではなく、それぞれのメディアに関わる人々の認識と運用がまだまだ分離していることにある。

アクセスしやすくなった多様なメディア技術を目的に合わせて関連づけながら、「普通の人々」が社会的コミュニケーションを編み上げていく可能性もこれまで以上に大きくなり、もはやメディアの枠組みを考えることもメディア企業内の人間である必要はなくなってきた。メディアの「かたち」を新たに直すためには、今、現実社会の中で試行錯誤されている実践の芽に目をこらし、そこから新旧技術の断層を有機的に架橋していく知見を抽出していくのも一つの方法だろう。そのため一つの手がかりとして、二〇一四年に福岡の小さな地域メディアが挑んだ大きな挑戦とその可能性について検討していこう。

三 『大河ドラマ追走番組・官兵衛で國創り』の概要

三―一 東峰テレビ設立の背景

福岡県朝倉郡東峰村。その村営テレビ局である東峰テレビでは、二〇一一年の開局以来、村役場の職員が創る『東峰ニュース』と村民スタッフ制作の『村民ひろば』の二番組を軸に自主放送を続けてきた。番組収録の時間になると農家、バス運転手、歯科医、陶芸家、会社員など、さまざまな職業の村民スタッフが空家となっていた診療所を改造したスタジオに集まって来る。スタジオに入ると彼らはキャスター、カメラ、スイッチャー、音声ミキサーなどに変身する。「最近のカメラは赤いボタンを押せばきれいに映るのだから、撮りたいものをまずは撮る。プロのような完成度にこだわる必要はないので、とにかく番組制作をやりながら力をつけていく」というのが局長であり総合プロデューサーである岸本晃の方針だ。村民にはそれぞれの生業があるの、出来る人が、出来る時に、出来る形で参加するのが原則である。この状況に至る経緯を理解するために、岸本が一九九〇年代から取り組んできた「住民ディレクター」育成について説明しておこう。

岸本がその構想を持つようになったのは、彼が熊本県民テレビ（日本テレビ系列）のディレクターだった一九八〇年代に遡る。熊本県内各地の問題を取材して回るうちに、ディレクターの仕事は番組を制作して放送すれば終わるが、地域の問題は放送後も変わらずそこに在り続け、問題の解決にはなっていないことに岸本は無力感を感じ始めた。テレビは一回取り上げたテーマをなかなか継続的に取り上げ続けることはできない。ならば、当事者である住民が自らの生活に関わるテーマを発信すればいいのではないか。取材をすれば自分が住む地域を見直すことにもなる。それを番組で共有することで住民同士のネットワークができていけば、その企画力や発信力は地域の発展にも役立つだろう。こう考え始めた岸本は熊本県民テレビを退社。任意団体「街づく

り応援団プリズム」を設立し、一九九六年には熊本県人吉球磨広域行政組合の行政職員を対象に住民ディレクター養成講座を始めた。同時に、彼らが制作した映像を放送する場として熊本ケーブルネットワーク（KC N）で『使えるテレビ』という番組をスタートさせる。一九九九年の熊本国体では住民がディレクター、キャスターとして取材や放送に参加することを県に提案し、県内九八市町村、約二二〇人の住民ディレクターが養成され活躍することになった。このような実績もあって、地域活性化を模索する各地から岸本に招聘がかかるようになる。二〇〇〇年代は全国各地に住民ディレクターの種をまき続ける期間となった。東峰村と岸本の縁ができたのも二〇〇七年に村からの要請で住民ディレクター講座を開いたのがきっかけだ。二〇一一年からは全国の住民ディレクターのネットワーク「社団法人 八百万人」が発足している。

二〇一〇年に東峰村で光ケーブルの敷設が決まった当時、村役場はCATVの空きチャンネルを、役場からの告知テロップなどで埋めることぐらいしか考えていなかったという。そこで、岸本は住民ディレクターを中心に「村民みんなで創る村民のテレビ」のコンセプトを村に提案。総務省のICTふるさと元氣事業の助成金申請が受理され、村役場でもCATV係を設け、二〇一一年に岸本が東峰村に移り住むことで東峰テレビの体制づくりが始まった。東峰テレビの放送設備は極めてコンパクトなものだが、岸本が最初からこだわったのがインターネットを使った中継システムである。これも熊本国体以来住民ディレクター活動に参画している技術に強いスタッフらの協力で作られ、二〇一三年までに三回ほどこのシステムを使った多元中継番組も行ってきた。画質、音声、安定性など、様々な課題はあったが、この技術的基盤や中継スキルが二〇一四年の「大河ドラマ追走番組」に活かされていくことになる。

三二二 『官兵衛で國創り』の枠組み

「NHK大河ドラマとゆるく連動しながら地域に埋もれたその時代との所縁を掘り起す」という番組コンセプトを岸本が思いついたのは、晩年福岡を領地とした黒田官兵衛が二〇一四年の大河ドラマの主役で、東峰村近辺にも黒田家に由来するモノ・コト・ヒトが多く残されていると聞いたからだだったという。こうして週一回、NHK大河ドラマ『軍師官兵衛』の全国放送が終わる日曜日二〇一四・四五から一五分、東峰村のCATVで『官兵衛で國創り』という番組が始まった。第一回から最終回までの五〇回、すべて生放送。レギュラー出演者は村民スタッフ仲道由美子（歯科医）と梶原京子（農家）と岸本プロデューサー。これに加え、その日のテーマについて語れる村民がゲストとしてスタジオもしくはインターネット中継で出演する座組みを軸に、取材した映像があれば短いVTRをはさみながら進行するという構成だ。CATV経由の視聴は東峰村村内に限られるが、この番組は生放送と同時に「Stream」でも同時配信され、インターネット経由であれば全国で東峰村の生放送を同時に視聴できた。また、インターネット回線をCATVスタジオに繋ぐことで、全国どの地域からでも生番組に中継出演できる仕組みが作られており、その日放送に参加できる全国の住民ディレクターたちの顔も「見守り隊」として画面にワイプで並ぶのである。福岡県以外で番組中継に参加した地域は一〇個以上の都道府県におよび、最終回二六時間TVは、一年の間に番組制作を通して繋がった人々がほぼ全員参加して全国各地を中継で繋ぎながら番組が行った。つまり東峰村限定のCATVに、インターネット中継と住民ディレクター群という、技術と人間の二つのネットワークを結節させることで、福岡の山間地の村営テレビ局が全国中継のハブとなる構造が出来上がっていった。

しかし、番組開始前に岸本がこの企画を東峰村村長や議員、住民ディレクターの中心メンバーたちに説明した時、この前例のない番組の形

式は関係者になかなか理解されなかったという。しかも東峰テレビの村民スタッフたちはほとんど歴史に関心はなかったし、大河ドラマを熱心に見る習慣もなかった。そもそも、NHKの『軍師官兵衛』の放送が始まるまでその内容を知るすべもない。スタート当初に決まっていたのはコンセプトと放送時間だけで、『官兵衛で國創り』の内容はほとんど白紙だった。

では、『官兵衛で國創り』の内容はどんなものだったのか。表1はNHKの『軍師官兵衛』と東峰テレビの『官兵衛で國創り』の五〇本のタイトル一覧である。NHKの『軍師官兵衛』は、播磨の小大名に仕える身であった黒田官兵衛が織田信長、豊臣秀吉の軍師として、乱世を生きぬいた生涯を描いたドラマである。だが、タイトル一覧でもわかるとおり、東峰テレビの『官兵衛で國創り』の内容は黒田官兵衛とは直接関係していない。「官兵衛」はあくまでも入口で、中心テーマはむしろ黒田二四騎のような官兵衛の家来たちや官兵衛の敵役、大河ドラマではほんの数分しか出てこない脇役などに焦点があたっている。東峰テレビのこれらのテーマがどのように展開されていたか、特徴的な回を取り上げながら見ていこう。

三二二 コンテンツ生成のプロセス

東峰村は高取焼・小石原焼の窯業で知られる旧小石原村と、農業を主産業とする旧宝珠山村が二〇〇五年に合併してできた村である。

『官兵衛で國創り』での地元史発掘は身近な高取焼から始まった。大名茶人小堀遠州好み七窯の一つとしても知られる高取焼は、実は秀吉の朝鮮出兵の際、黒田官兵衛、長政父子が半島から連れてきた陶工、初代高取八山によってこの地に起こされた黒田藩御用窯だった。だがそのような由来については東峰村の村民も詳しく知らない。第二回放送では、高取焼宗家一三代の妻、高取七絵がスタジオ出演。高取焼の由来や家の床の間にさりげなくかけられている黒田二四騎の掛け軸が黒田家からの拝領品であることが語られた。東峰村や近隣地域に

は大河ドラマの登場人物の菩提寺などが散在する。命日法要などの行事は必ず住民ディレクターの取材対象となった。黒田官兵衛の命日には、梶原京子（農家）レポーター、辻富貴男（農家）カメラマンが福岡に取材に行き、法要の会場で現在の黒田家当主や福岡県知事に直撃インタビューを敢行している（第一二回）。

取材相手の情報から次のテーマが生まれる流れも、早い段階から見られ始めた。第五回は福岡在住の東峰村出身者でつくる「福岡こいしわら会」のメンバーの案内で、福岡市の黒田家ゆかりの地をめぐる取材が行われた。その際、彼らから黒田二四騎の一人、原弥左衛門が東峰村の出身で、村内に墓もあるらしいという情報もたらされた。次の第六回のテーマは弥左衛門の墓探しだ。東峰村宝珠山地区に「原」という苗字の人が住んでいたという村民情報を手がかりに現地に行く、その子孫だというおばあちゃんに出会い、山の中の「殿様のお墓」を教えてもらう。ちなみに、福岡こいしわら会は東峰テレビ出演の機に合併後初めて旧宝珠山出身者も交えた「東峰の会」に改名。熊抱勝彦会長の「東峰テレビと取材で会うことが出来て、田舎（東峰村）が近くなった気がする」という言葉が印象的だった。

このように、地域の歴史に詳しい高齢者や郷土史家の話は企画の貴重な情報源となり、番組は彼らの活躍の場となっていった。東峰村がある朝倉郡一帯には黒田官兵衛が建てたとされる六つの城跡が散在し、東峰村村内にもその一つ松尾城跡がある。しかし、徳川時代の一国一城令により城自体は壊され石積みしか残っていないため、村民にもあまり知られず一見普通の丘にしか見えない。第九回では東峰村文化財調査員の日高正幸が案内役となり、松尾城が筑前と豊前の国境を守る要であったことや、城壁の石の積み方の解説を行った。

この松尾城の話から、城主の黒田六郎衛門を訪ねて黒田二四騎の一人、後藤又兵衛が松尾城までよく酒を飲みに来ていたという逸話が出てくる。次の第一〇回ではその道中に渡ったという「後藤橋」の探索がテーマとなった。地元のおばあちゃんに教えてもらった「ごっとな

表1 NHK&とうほうTV タイトル一覧

No.	放送日	NHK『軍師官兵衛』	とうほうTV『官兵衛で國創り』
1	1月5日	生き残りの掟	住民ディレクター発の官兵衛とは
2	1月12日	忘れ得ぬ初恋	黒田家御用窯高取焼
3	1月19日	命の使い道	官兵衛とあさくら軍師プロジェクト
4	1月26日	新しき門出	福岡の官兵衛地域活性化戦略
5	2月2日	死闘の果て	村出身者と歩く官兵衛ゆかりの高福寺・光雲神社
6	2月9日	信長の賭け	東峰村出身・黒田24騎「原弥左衛門」
7	2月16日	決断のとき	官兵衛で盛り上がるあさくら地域
8	2月23日	秀吉という男	太宰府天満宮の官兵衛
9	3月2日	官兵衛試される	国境を守った松尾城（六端城）
10	3月9日	毛利襲来	後藤又兵衛の石橋・大隅城（六端城）
11	3月16日	命がけの宴（うたげ）	栗山善助と円清寺
12	3月23日	人質松寿丸	官兵衛の命日
13	3月30日	小寺はまだか	國創りで生まれた村民ドラマの数々
14	4月6日	引き裂かれる姉妹	光姫と上月城（佐用町）
15	4月13日	播磨分断	姫路黒田（播磨）武士団・八百万人紹介
16	4月20日	上槻（こうづき）城の守り	栗山善助・麻氏良城（六端城）
17	4月27日	見捨てられた城	小石原焼 民陶むら祭り
18	5月4日	裏切る理由	村重の伊丹中継・民陶むら祭り本番レポート
19	5月11日	非情の罨	官兵衛と村重の友情（伊丹）・朝倉と村重解説
20	5月18日	囚われの軍師	朝倉にいた村重子孫・秋月鎧揃え保存会
21	5月25日	松寿丸の命	だし姫の長男（伊丹）・官兵衛博多人形
22	6月1日	有岡、最後の日	母里太兵衛400回忌
23	6月8日	半兵衛の遺言	軍師“二兵衛”（半兵衛と官兵衛）・原鶴温泉
24	6月15日	帰ってきた軍師	信長の天下布武・宝珠山木工塾
25	6月22日	栄華の極み	25話振り返り
26	6月29日	長政初陣	NPO くまもと未来・兵庫県佐用町
27	7月6日	高松城水攻め	岩手県盛岡市、松尾城・姫路
28	7月13日	本能寺の変	京都・本能寺
29	7月20日	天下の秘策	栗山善助・志波（朝倉市）、山笠～
30	7月27日	中国大返し	黒田24騎絵馬奉納・福岡市博物館 松坂桃李登場！
31	8月3日	天下人への道	東京杉並・小泉進次郎政務次官イノベーション座談会
32	8月10日	さらば、父よ！	浜田岳さん独占インタビュー、黒田24騎博多人形
33	8月17日	傷だらけの魂	栗山善助法要・光姫の故郷加古川・村重の伊丹・朝倉より
34	8月24日	九州出陣	宇留津城地域に住む町長、官兵衛最初の居城・馬ヶ岳
35	8月31日	秀吉のたくらみ	宇都宮鎮房（福岡県築上町）、小石原焼と官兵衛
36	9月7日	試練の新天地	長政、馬ヶ岳、城井谷、原弥左衛門、松尾城
37	9月14日	城井谷（きいだに）の悲劇	大野小弁、小山田地区、原弥左衛門、神楽城、宝珠山大明神
38	9月21日	追い込まれる軍師	中津・合元寺・黒田六郎右衛門・肥後一揆
39	9月28日	跡を継ぐ者	あさくら軍師プロジェクト、黒田一成、加藤重徳
40	10月5日	小田原の落日	26時間テレビ、これまでの官兵衛で國創り
41	10月12日	男たちの覚悟	スタッフ紹介
42	10月19日	太閤の野望	軍師官兵衛と地方創生、渋谷PRイベント
43	10月26日	如水（じょすい）誕生	名護屋城・DJ日本史
44	11月2日	落ちゆく巨星	関ヶ原・石垣原合戦
45	11月9日	秀吉の最期	高取焼、内ヶ磯、白旗
46	11月16日	家康動く	黒田24騎、桐山孫兵衛、村田兵助
47	11月23日	如水（じょすい）謀る	博多、町割り
48	11月30日	天下動乱	キリシタン、秋月
49	12月7日	如水最後の勝負	吉弘統幸、熊本市
50	12月21日	乱世ここに終わる（最終回）	官兵衛で國創り26時間テレビ

橋（後藤橋のなまり）」は畑の間にさりげなくかかる小さな鉄橋。昔の石橋の部材の残骸がその脇に積まれ草に埋もれていた。この橋を渡ってきたという後藤又兵衛の居城、益富城が東峰村に隣接する嘉麻市にあることから、この回では嘉麻市のCATVとの連携取材が実現する。

歴史の舞台は現在の市町村の境界と関係ない。地元でも忘れられていた地域史が、バトンを繋ぐように番組で紹介されていく経緯の中で、『官兵衛で國創り』は東峰村以外の地域との連携のきっかけにもなっていく。岸本は黒田官兵衛と縁がある地域の住民ディレクターに『官兵衛で國創り』企画を説明し、取材や中継出演を要請していった。その結果、住民ディレクターたちのコーディネートで、各地の観光や歴史文化に関わる人々がVTR制作やスタジオ出演をするようになっていく。

官兵衛の筆頭家老、栗山善助の居城だった左右良城跡や菩提寺円清寺がある東峰村に隣接する朝倉市、ここではNHKの『軍師官兵衛』をきっかけに、「あさくら軍師プロジェクト」を立ち上げた。レポーター担当の広域環境協会の里川径一、企画・撮影担当の商業観光課の田中幸夫、解説担当の文化課文化財係の隈部敏明らは朝倉市内の栗山善助ゆかりの寺や城跡、栗山善助によって始められた祭りやしきたりの紹介する中（第一一回・一六回・二九回）、『官兵衛で國創り』の常連出演者となっていた。意外な発見が東北からもたらされたのは第二七回。黒田官兵衛のトレードマークでもある赤合子兜がなぜか岩手県盛岡市のもりおか歴史文化館にあるという情報が、岩手県住田町の野田尚紀から伝えられ、彼の案内で岩手取材が行われた。実は赤合子兜は官兵衛死後、遺品として筆頭家老の栗山善助に託された。しかしその後、善助の息子、黒田大膳が主君を幕府に提訴するという黒田騒動を起して盛岡に流され、その際兜も一緒に盛岡に渡っていたのである。畑仲美耶子館長によれば「赤合子兜は歴史館開館時から飾られていたが、大河ドラマ軍師官兵衛との関連で取材されるまでその由来を盛岡の人々もよく知らなかった」という（第二七回）。いにしえの兜が結

ぶ朝倉市と盛岡市の意外な縁は、年末の二六時間TVの「官兵衛の赤合子兜列島縦断リレー中継〜九州・東北ふれあいの旅〜」という企画に繋がり、提案者であるさくら軍師プロジェクトの里川が赤合子の兜と対面するために、甲冑姿で九州から盛岡まで在来線を乗り継ぎ各所からモバイル中継レポートをする展開につながった。

栗山善助をめぐる展開はさらに続く。栗山善助の菩提寺、円清寺檀家代表の富田栄一は、善助の命日にむけて「大河ドラマの栗山善助役の浜田岳さんからメッセージをもらえないか」と考え始めた。そこで富田は栗山善助に対する地元の想いを手紙にしたため、岸本からは番組意図などのメッセージを添えて、無理を承知で浜田岳に交渉したところ、快諾の返事が来たのである。第三二回では富田栄一が東京渋谷のNHKで浜田に取材する模様が紹介される。浜田自身、役作りのために自分でも栗山善助について調べる中で、農民出の善助が城下の人々に分け隔てない君主であった逸話の数々を知り、菩提寺円清寺にはいつか行きたいと思っていたという。第三三回で放送された栗山善助の法要では、「農民から官兵衛に育てられ人格者になった善助を円清寺や左右良城のまわりに住む皆さんにも誇りに思ってもらえるように日々がんばっています。長い時を経ても法要というかたちで、地元の方々に愛されていることをこういう機会に感じることができて、現代の善助としてもうれしい」との浜田のメッセージが円清寺で流され、集まった檀家衆を喜ばせた。実は朝倉市に住む栗山家の末裔の人々は、黒田大善が叛逆者とされてきたため、今日でも肩身の狭い思いをしてきたそうだ。しかし、『官兵衛で國創り』で善助の業績が語られ、大善は主君の蛮行を諫め黒田藩を守った人物であることが解説されたことで、現在の栗山家の名誉回復につながったという。

歴史の中で「脇役」「悪役」「敗者」とされてきた人物たちの復活戦は他にも数々果たされた。その典型例が官兵衛を裏切り、最終的には妻子家臣を捨てて逃げた卑怯な武将として描かれている荒木村重だ。第一八回から二二回までのNHK『軍師官兵衛』では、親友荒木村重

を織田陣営に付くよう説得しに行った官兵衛が、村重の居城、有岡城で一年間幽閉されるストーリーが展開していた。この時期東峰テレビの『官兵衛で國創り』でも毎週、有岡城がある兵庫県伊丹市からの中継が続いた。第一八回では、伊丹高校教師の畑井勝彦と生徒たちが、大河ドラマで謀反者として描かれている荒木村重が、伊丹では心優しい武将として市民に愛されてきていることをレポート。続く一九回は伊丹文化財ボランティアの会の池田利男会長が、最近発見された官兵衛から村重にあてた書状から、官兵衛と村重の友情は修復されていたとの見解を披露し、有岡小学校まちづくり協議会石田真弓が有岡城で開催する歴史企画を紹介した。

この伊丹市の荒木村重の話は、福岡県朝倉市の隈部敏明の取材と解説に引き継がれた。官兵衛は有岡城で牢番をしていた加藤重徳との間に信頼関係をきずき、後に加藤の次男を養子にする。これが黒田二四騎の最年少、黒田一成となり朝倉市に居を構えていたのである。隈部はその経緯や荒木村重の娘の墓も朝倉市の大涼寺にあることを第一九回、第二〇回で紹介した。この放送で朝倉市との縁を知った伊丹市の人々は、隈部を伊丹市で行われた歴史シンポジウムのパネラーとして招き、第二一回では、このシンポジウムに参加するために兵庫県に行った「あさくら軍師プロジェクト」のメンバーが姫路から中継で登場する展開となった。番組を媒介とした伊丹市と朝倉市の出演者たちの交流は、現実の世界へと発展していったのである。

住民たちにも「何もない田舎」と思われていた地域は、実は黒田官兵衛や彼を支えた黒田二四騎たちが行き来し、城を作り、寺を守り、祭りやしきたりを生活の中で伝えてきた地域であったことが、地元の人たちや郷土史家、住職、末裔の人々たちの話から蘇っていった。改めていうまでもないが、一般的に認知されている「大きな歴史」は、基本的に勝者によって書かれた歴史である。住民ディレクターの視線は大河ドラマの主人公を中心とした「大きな物語」の裏面に張り付いた「小さな物語」を掘り起し、地元ですら関心を持たれなくなってい

た郷土の歴史を語り合い、遠隔の地域同士で共有することで、思わぬ繋がりを発見していった。このプロセスは、「民の物語」の新たな紡ぎ方のヒントも孕んでいる。紙面に限りがあり五〇回の番組の中で起こったほんの一部しか記述できないが、『官兵衛で國創り』が大河ドラマを追走しながらも、全く別の世界を展開していたことが垣間見えたかと思う。最後に最終回の『大河ドラマ追走二六時間テレビ』に触れておこう。

住民ディレクターによる『官兵衛で國創り』は、始まった直後からマスメディアの取材の対象になり始め、雑誌、新聞、民放テレビなどで取り上げられた。六月にはNHK福岡のクルーが東峰テレビを取材し、NHKローカル番組『はっけんTV』で放送した。このような経緯の中で、最終回の二六時間TVではNHK『軍師官兵衛』の中村高志チーフプロデューサーもビデオメッセージを寄せている。

二六時間テレビの発想はもちろんマスメディアの長時間マラソン番組の「型」をモデルとしている。「とうほうTVをキーステーションに『官兵衛で國創り』に参加した全国の地域が映像を駆使して語り合うリレー中継。戦国時代から今日までの歴史を超えたネットワーク・コミュニケーションを番組で実現する」という最終回番組のコンセプトを岸本はこの「型」を使って実現しようとした。この構想を聞いた参加スタッフたちの反応は「本当にそんなことできるのか？」という程度だったが、一月頃から具体的な企画が動き始める。全国の住民ディレクターたちの人的ネットワークをつなぐインターネット企画会議を中心に、「官兵衛と光姫ネットワーク」「歴史・歴史男バトルロワイヤル」「文化財委員座談会」「長政の食事レシピ」「伊丹vs品川『忠臣』を考える」「官兵衛の赤豆子兜列島縦断リレー中継〜九州〜東北ふれあいの旅」「故郷一〇〇名品プレゼント」etc.というようなコーナー企画が次々と練り出されていった。

二六時間TVの全体の流れを簡単に記しておく。

・一月二〇日(土)

二〇時番組開始。インターネット中継を全国と繋ぎながら『官兵衛で國創り』の概要説明。

二三時からは「歴女・歴男バトルロワイヤル!!」を展開。
夜中は『官兵衛で國創り』四九回の再放送。

・二月二一日(日)

六時〜「ノーミン!朝!!」

七時〜「ジューミン!朝!!」

八時〜「コムイン!朝!!」

〔官兵衛で國創り〕と直接関係してこなかった各地の住民ディレクターも交え、農民、住民、公務員が各地域の状況を発信する中継リレー)

九時からは、各地からのインターネット中継を交え、準備されたコーナー企画が次々に展開。

二〇時にNHKの『軍師官兵衛』の最終回を見た後、
二二時番組終了。

二六時間TVの間にインターネット中継によって番組に参画したのは五〇地域、二〇〇人以上にのぼった。一年前にお互いの存在すら知らなかった住民ディレクターたちのネットワークが、まさに可視化された二六時間であった。

四. メディア表現の「かたち」「なかみ」「あいだ」

四一 「構造」と「内容」の間にあるもの

『官兵衛で國創り』は一般的には、一地域メディアのミニ番組という分類になるだろう。しかし、この番組を一つの表現の枠組みとして捉えた場合、その「かたち」構造」と「なかみ」内容」と、それを繋ぐ諸要因の「あいだ」関係」には、通常の番組形式とは違った特徴がみられる。

メディアの在り様は、まず技術、制度、経済、組織などある程度人

為的に操作することが可能な諸要因から成る「かたち」構造」に大きく左右される。東峰テレビが村営テレビ局であることは、制度的、経済的側面において、『官兵衛で國創り』の実現の大きな要因だったといえるだろう。この番組はスタジオトークを中心に取材VTRと中継を構成した週一回の生放送という、極めてオーソドックスなテレビ番組の型を踏襲している。また、Ustreamのインターネット中継、Google+を使った複数人による映像チャット、YouTubeでのアーカイブなど、活用されているインターネット機能も特に珍しいものではない。だが『官兵衛で國創り』の技術面での特徴は、インターネット中継を単にCATVを視聴できない地域の人々に見てもらうために行ったのではなかったことだ。CATVの番組をUstreamで配信するだけなら双方向性をCATV番組の中に持ち込むことはできない。インターネット回線を「制作回線」としてCATVの放送回線に取り込む仕組みを作ったことで、東峰村以外の地域の住民ディレクター達が、生放送番組の進行を共有しながらレポーターとして中継で参加できる方法が編み出されたのである。もちろん、既存テレビでは多元中継を行うことはいくらでもある。しかし、番組の中継ネットワークが、あくまでも一般の参画者の意図によってボランティアかつテンポラリーに毎回結節される柔構造は、既存マスメディアではなかなか実現できない。いってみれば、CATVとインターネットの関係を運用によって繋ぎ直すことで、視聴もしくは参加する人々の居場所によって、番組にアクセスするインターフェイスを選択できる技術的な構造が可能となり、「各地の住民ディレクターが放送時間を共有しながら語り合う」という表現が成立したのである。これが実現するためには、『官兵衛で國創り』が終始生放送で行われることは技術的に必須要素であった。またたとえ一五分であっても参加者が毎週時間を共有することは、連携的なコミュニケーションを生み出していく運用上も非常に重要な要素だったといえる。

三章で見てきたとおり、『官兵衛で國創り』の「なかみ」内容」の

生成過程からは、番組と縁が出来た人たちが次第に主体的な企画者となり、「内容」制作に関わっていったことが見て取れた。しかし、番組のスタート段階で決まっていたのはコンセプトと放送時間だけで、具体的な内容もそれを制作する担当者もほぼ決まっていなかった。遠隔地との打合せは密にできないこともあり、一回一回の内容は各地域の住民ディレクターの判断にまかされた。面識もない各地の担当者たちが、それぞれの関心事を発信したにもかかわらず、話がバラバラにならずに、ひとつの発信が次の内容を生んでいく生成プロセスが可能だったのはなぜだろうか。

普通の生活者が稼業の空いた時間に、出来る範囲で制作に参画する住民ディレクター番組においては、映像がブレたり、言葉につまったり、放送の最中にインターネット中継の映像や音声が途切れるなどということは日常茶飯事である。いわゆる一般的な意味での完成度は高いとは言いにくい。だが岸本はかねがね、住民ディレクター活動の最も重要な意義は、番組制作の過程で地域を見直し、人と人の繋がりを作ることであり、「番組はおまけ」という言い方をしている。一見、行き当たりばつりのように見えるが、コミュニケーションを発生させること自体が住民ディレクター番組の元々の目的であり、固定化された「受け手」に情報を伝達するために設計されている既存マスメディアの「型」とは違うと考えると、その未完成度が許容されることの意味が見えてくる。マスメディアの制作過程は通常、まずコンテンツの企画考え、組織や技術やフォーマットを整え、そこから視聴者との関係性を生み出していく、「かたち」↓「なかみ」↓「あいだ」というプロセスを踏んでいる。しかし、『官兵衛で國創り』の全体構想を考えた岸本の頭に最初にあったものは、どんなメディアを使うかという「かたち」でも、具体的な番組企画内容である「なかみ」でもなく、関係する人々の間にどういう関係を作っていくのかという「あいだ」だった。この命題を実現させるための装置として「かたち」が生み出され、そこで発生したコミュニケーションの中から「なかみ」が連鎖

的に生成されていったのである。

このようなプロセスから、『官兵衛で國創り』モデルでは既存テレビの表現の型を借りていながら、マスメディアとは全く違う「かたち」と「なかみ」の関係性ともいべき「あいだ」の在り方が見えてくる。

四二 『官兵衛で國創り』モデルにおける「あいだ」の考察

『大河ドラマ追走番組・官兵衛で國創り』の全体の関係性を俯瞰すると図1のようになる。「なかみ」内容」の生成プロセスは、番組制作というメディア空間のレベルと現実生活のリアル空間のレベルの相互関係に支えられている。

上の楯円は地上波TV、CATV、インターネットなどの媒体とそこで発生するコミュニケーションを構成要素とする「メディア空間」だ。前述した通り、NHK大河ドラマが全国に届くコンテンツであるのに対して、東峰テレビの『官兵衛で國創り』はCATV経由では東峰村でしか視聴できない。このモデルが通常の地域メディアと違う点は、東峰村以外の地域からの番組参加をインターネット経由で成立させたことだ。この番組のインターネット視聴は番組参画地域とほぼ重なっていると考えられる。各地域の住民ディレクターの活動は、通常それぞれの地域の中に閉じている。マスメディア組織のような強制力がないにもかかわらず、日常的な接点のない各地域のボランティアな住民ディレクターが継続的に地域間にコミュニケーションを生み出し続ける上で、「大河ドラマ」という誰もが関われる「共通テーマ」の設定には重要な意味があった。

一九六三年以来続いているNHK大河ドラマは、好き嫌いは別として全国で認知されている日本最大の時代劇だといえるだろう。テレビ離れなどが言われる今日でも、その年の大河ドラマの舞台となった地域はそれを観光資源にしようとする盛りが上がる。同時に、「大きな歴史」をドラマというわかりやすい形式で五〇年以上伝え続けてきたことよって、大河ドラマが日本人の歴史認識を上塗りし続けてきたことも

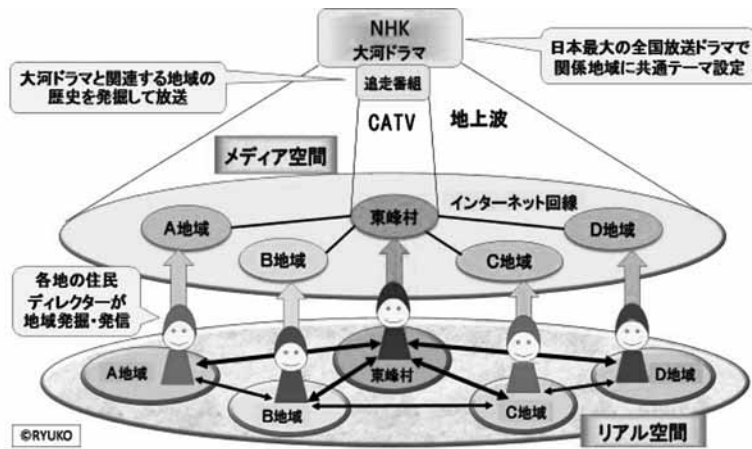


図1 「住民ディレクター番組」の循環プロセス

呑めない。岸本が注目した「大河ドラマ」の特性は、この誰もが知っているテーマ設定と地域の心理的な盛り上がりであると同時に、「大きな歴史」を軸とするがゆえに見える、その裏側で地域に、細々と語り継がれてきた「小さな歴史」を発見する可能性だった。東峰村内部だけであれば、もっと村に特化したテーマのほうが村人からは歓迎されるだろう。しかし、他地域の住民ディレクターたちの間に広域コミュニケーションの連鎖を生み出そうとすると、地域間で共有可能なテーマ設定が必要となる。この共通テーマを軸に自発的に「なかみ」

が生成されていく関係性が生み出されていったことは、『官兵衛で國創り』の一連のプロセスから見ることが出来る。

この番組のすべての「制作者」「出演者」は各地域の関係者であると同時に通常時は「受け手」である。しかし、大河ドラマの展開によっては次の週には「送り手」として「なかみ」の制作に携わっている。中には、制作に巻き込まれたことで初めて番組の存在を知り、「受け手」になっていく現象も

発生していった。だが、こういう関係性の中にあってもコミュニケーションが拡散することを留めていた要素は、「黒田官兵衛にゆるく関連する地域情報を発信する」というコンセプトと「周期的な定時放送」という編成枠組みが参加者たちの間に共有されていたことだろう。逆かというと、岸本が番組開始時に決めていたことはこの二点だけだった。これは、個人として自分の好きな時に好きな発信ができるインターネットに較べれば参画の自由度を下げている要素である。しかし、メディアでの活動を職業としていない人々にとって、「誰でも何でも発信できる」という自由さは、逆に「何を発信したらいいのかわからない」というハードルにもなり得る。普通の生活者が「送り手」になるためには、日常生活のリズムの中に発信活動が組み込まれること、いつもの生活空間の延長線上で制作や出演ができることなど、参加のハードルを下げるオペレーションも不可欠だ。コンセプトと定時放送という一見「縛り」に見える枠組みがあることが、逆に参画者をメディア空間に継続的に誘う上で重要な要素だったともいえる。

一方、図1の下の楕円はリアルな現実空間である。『官兵衛で國創り』の制作体制は東峰テレビ（実質的には岸本プロデューサー）という中心点はあるものの、明確な組織的輪郭を持たない各地域とのネットワーク構造だ。『官兵衛で國創り』以前、住民ディレクター同士の面識はなく各地域に散在している状況だった。それぞれが出演するきっかけは岸本から声をかけられたケースがほとんどだ。つまり、岸本が住民ディレクター活動を通して「リアル空間」で知り合ってきた「人」が各地に存在していたことが、このネットワークの大前提だった。出来事取材して語るという作業は「リアル空間」との接点なしには不可能だ。発信に対するリアクションも現実社会で発生する。番組を通して自分の地域の情報を発信すると同時に他の地域のことを知り、この過程で住民ディレクター同士のSNSや現実空間での交流も発生し、それがまた番組のコンテンツ展開を生んでいった。つまり、「メディア空間」でのネットワークは「リアル空間」に支えられており、この

ような「メディア空間」と「リアル空間」を跨ぐコミュニケーション循環の中で人的なネットワークも形成されていったといえる。

『官兵衛で國創り』に関わった住民ディレクターたちそれぞれが、コミュニケーションの全体性を考えていたわけではない。だが、「かたち」や「なかみ」以前にどのような人々のいかなる「あいだ」を生み出すかという岸本の発想の転換は重要である。そのことが結果的にメディア領域とリアル領域を跨がるコミュニケーション空間を創り出し、「受け手」を「送り手」へと誘うと同時に、番組制作プロセスを通して人的ネットワークを可視化する、コミュニケーション・システムを機能させていったともいえるだろう。

五・有機的システムとしてのメディア・デザインの課題

東峰村村営テレビ局の住民ディレクター発『大河ドラマ追走番組・官兵衛で國創り』を事例に、メディア媒体や「全国ローカル」送り手「受け手」などのメディア区分を越境・架橋していく表現枠組みの試みを見てきた。そこに浮かび上がってきたのは、一般の人々の表現の連鎖を受け入れたマスメディアにはない開放性と、偶発的コミュニケーションを基本にしながらもインターネットメディアのように拡散していかない集約性を合わせ持つ表現モデルの可能性だ。

メディアの社会的様態のありようから、メディアと人と社会の間関わり方の新たな可能性を探求してきた水越伸は、「媒の形態学的関心から出発したメディア論の企図を未来のメディア社会に向けて投影したとき、そこに能動的にメディアと共同体のありようを構想するデザインという営みを見出すことができる」と指摘する¹⁷⁾。だが「一般の人々の自発的な発信」という不確定要素を前提としながら、参画者たちが有機的に関係しあい表現を共同で紡いでいく社会的コミュニケーションを構想する現場では、どこまで人為的なデザインが可能で、どこからはコミュニケーションの自己生成に委ねるべきなのか、という問題

に私たちは直面する。コミュニケーションの自律的創発性を考察していくためには、メディアを諸要素の相互関係から成る全体性を備えた動的なシステムとして捉えていく方法が必要になってくる。昨今、インターネットにおけるコンテンツの生成過程を有機的システムとして検討する動きが見られるが、それはインターネット領域の中に限定するべきではなく、メディア空間とリアル空間を循環するコミュニケーションにおいても求められる視座だと思われる。

IT技術の普及以降、「システム」という言葉は一般的に、より技術的イメージの中で使われることが多くなった感がある。しかしこれは元々、生物学者フォン・ベルランフイが生物体を有機的複合体として研究する方法論として一九四〇代から提唱した概念だ。彼は「部分や過程をばらばらに研究する」物理化学的方法では、生物に見られるような「部分間の動的な相互作用の結果であるオーガニゼーションや秩序」は捉えることが出来ない¹⁸⁾と考えた。「互いに相互作用している部分からなる全体性」を「システム」とする彼の一般システム理論の考え方は、有機的生態系システムのみならず計画的に創られた社会システムをもカバーし、社会学、心理学、行動科学、情報工学など様々な領域で応用展開されてきた。構成諸要因の動的な相互関係性の中で成立しているメディアの在り方や、その相互関係の総和として認識されているメディアの生態系の問題も、構成要素を部分として切り離して検討することが現実的ではないことは明らかだ。メディア表現とシステム論をいかに結節させていくかという問題は、メディアをデザインしていく実践においても不可欠な課題だといえるだろう。だが本稿でこの問題を十分考察する余裕はない。そこで一つの足がかりとして、拙速を覚悟の上で、オートポイエシス概念を社会システム論に導入したニコラス・ルーマンが、マスメディアを「閉鎖的オペレーションによる社会システム」として分析した際の議論を補助線として、メディアをシステムと見た場合のデザインの可能性について考えてみたい。

ルーマンは社会システムを形成する要素を「コミュニケーション」

と捉え、コミュニケーションの形態によってシステムの在り方が規定されていると考える。特別な社会システムとして分化したマスメディアにおいては、送り手と受け手と同時的インタラクションが技術的に遮断されるとみえず。これは伝播技術の発達に伴うものだが、インタラクションの遮断は、マスメディアの自己組織内でのオペレーションを閉鎖的にコントロールすることを可能にしている大きな要因であると指摘する。

「そのような技術（伝播技術）は、それ自体としてはたんに媒質となつて形式をつくることを可能にしつつ、形式はその媒質自体とは異なつて、コミュニケーション的オペレーションを行い、システムの分化とオペレーションによる閉鎖を可能にしているのである」^②。

システムは環境から区別されて初めて成立するわけであるから、システムと環境の間でどのような形態で情報が選別されているかによってシステム内のコミュニケーション様式は規定されるとルーマンは考え、マスメディアとは「インフォメーション／非インフォメーション」というコードで情報を選別するシステムであると定義づけている。あるシステムがどのコミュニケーションを取り入れて何を排除するのかを決めるのが「コード」であり、何がインフォメーションで何がインフォメーションとして価値がないかを仕分けするのは、あらかじめコミュニケーションの領域を設定する「プログラム」であるとする^②。

このようなルーマンの議論はかなり図式的ではあるが、マスメディアの現実の一端をうまく説明しているといえよう。たとえば代表的マスメディアであるテレビの場合、時間編成や番組の種類、コンセプトなどで「プログラム」された番組が具体的な領域として設定され、定期的に情報を発信するための企画選定、取材、編集、発信の一連の「オペレーション」は、それをやる人間が誰であろうと継続されるこ

とが自明とされている。企画の選択基準や情報の取捨選択を決める「コード」は、それぞれの番組の種類やコンセプトにそつて暗黙のうちに設定されており、「コード」によって排除された情報は制作者個人が望んだからといって番組の中に持ち込むことはできない。選択が妥当であるか否かの判断は視聴率や視聴者の意見を参照にするとしても、番組内の循環は基本的に内部的コミュニケーションとオペレーションの連鎖によって自己完結的に継続されていく。最近では番組の中でインターネットのコメントを取り入れるような演出も見られるが、あくまでも番組システムのオペレーションに許容された範囲内で行われている。

だが、それにもかかわらず、マスメディアが社会から外れず、むしろ社会のリアリティを形成することができるのはなぜなのか。ルーマンはマスメディアが社会のあらゆる領域に到達するコミュニケーションのテーマを保障しているからだとする。

テーマはコミュニケーションが避けて通ることのできない必要条件である。それはコミュニケーションの他者言及を表象している。それは、議論を関連付けられた複合体へとまとめ上げて、現在進行中のコミュニケーションにおいて、あるテーマが維持され継続されているか、あるいは変更されたかをわかるようにしている^②。

コミュニケーションにおける「テーマ」の重要性のこの指摘は、『官兵衛で國創り』モデルにおける「大河ドラマ」というテーマ設定の意味を思い起こさせる。ルーマンがマスメディアを分析した「テーマ」「コード」「プログラム」「オペレーション」というパラメーターで『官兵衛で國創り』を見直してみると、「大河ドラマにゆるく連動した住民による地域情報」というコンセプトが基本的な「プログラム」設定領域だったといえよう。また、マスメディアの「コード」が「不

特定多数の視聴者にとって情報である／ない」であるとすれば、『官兵衛で國創り』のコミュニケーションを規定していたのは「発信者が関心を持っている／いない」という「コード」であり、これが住民ディレクターたちの企画や発信に対する自主参加性を開いたともいえる。

『官兵衛で國創り』では、「テーマ」選択、「プログラム」設計、「コード」設定、「オペレーション」運用などは岸本が行っていたことになる。これらが結果的にシステム内のコミュニケーションを規定する要素であるならば、これらの要素に対してどのような人為的な働きかけを行なうかは、メディア・システムのデザインに際してさらに検討に値するであろう。

最後に、本稿で残された大きな課題を挙げておく。それは、「あいだ」関係」の在り様においてきわめて重要な要素である、番組制作に参画した住民ディレクターたちのモチベーションに踏み込めなかったことである。システム内のコミュニケーションが自律的に生成されるとしても、それを規定する要素のデザインに誰が関わり、そこに参画している人間がどんな意図でどう動くかはシステムの在り様を大きく左右するはずだ。人間とシステムの関係については、ベルタランフィも「システム工学のユートピア論者にとって信頼できない要素は『人間的要素』とされる」ことに危機感を持ち、この問題は彼の晩年の大テーマであった²⁴。不確定要素を排除する閉鎖的オペレーションが恒常化していくことで、「人間」がシステムのコミュニケーションから疎外されていく構図は、社会システムのいたるところでみられる普遍的な問題だ。だが、システムの目的によっては不確定要素もマイナス要素だけではないだろう。不確定要素があるからこそ思わぬ創発的コミュニケーションを可能にすることもあり得る。創発性を生み出すためのコミュニケーション・システムとしてメディアをデザインする場合に、むしろ、不確定性をどうオペレーションの中に組み込めるかということがシステムの「開き具合」のデザインに関係してくるはずだ。人間とメディア・システムの関係性については、さらに様々な角度か

らの検討が必要である。

マスメディア、ネットメディアを問わず、すでにオペレーションが固定している既存のメディア・システムの中で表現をするとき、人はその枠組みの中で許された表現しかできない。だが環境と目的によって、求められるメディアの在り様は違はずだ。自分が求める表現やコミュニケーション形態を既存のメディア・システムで実現できないなら、新しい枠組みをデザインするしかない。社会的なシステムの場合、そのシステムのプログラムを書くのは神の手ではない。それは「人間」にしかできない行為なのだ。そう考えると、一般的に言われている、マスメディアは閉鎖的で市民メディアやネットメディアが開放的であるという言い方は正しくないのだろう。メディア・システムの開放性／閉鎖性という傾向もメディア媒体の技術的な性格ではなく、システムを成立させるコミュニケーションを方向付ける諸要素の在り方の問題だ。従ってインターネットの中にも閉鎖型システムはあるし、オペレーションによっては開放型マス・メディアのデザインも可能はずである。

東峰村では今年の四月からさらに新たな試みが始まっている。次の挑戦は『官兵衛で國創り』モデルの枠組みを活かしつつ、「テーマ」を今日各地で大きな課題となっている「地域活性」に置き換えた広域連携の「地方創生番組」だ。今後の展開には課題や、未知数の部分も多いが、今各地で芽吹きつつあるこのようなボトムアップ型の試みは貴重である。多くの不確定要素を孕む「マス」が「コミュニケーション」する社会的コミュニケーションのデザインの元手は、このような実践を丁寧に拾い上げていく中で得られるものではなかるか。デザインの想定は往々にして現実に裏切られる。だがその試行錯誤こそが、メディアの境界線を越境、架橋していく表現の可能性を開くプロセスだと考える。

注

- (1) 東峰テレビ制作「住民ディレクター発！官兵衛で國創り」紹介資料。
- (2) Ustream、YouTubeはいずれもインターネットの動画投稿システムだが、Ustreamは同時中継を、YouTubeはビデオクリップ投稿を得意とするため使い分けられている。
- (3) 第一回現地調査二〇一四年三月九日～十一日
第二回現地調査二〇一四年九月一日～五日。
- (4) McQuail, Denis (1999) *Mass Communication Theory* 『マス・コミュニケーション研究 (第四版)』大石裕監訳、慶應義塾大学出版会、二〇一〇年、三―四頁
- (5) 水越伸 (一九九三) 『メディアの生成 アメリカ・ラジオの動態史』同文館出版、七四―八三頁
- (6) Brecht, Bertolt (1932) 大石英男責任編集、五十嵐敏夫・石黒英男・内藤武・野村修訳「コミュニケーション装置としてのラジオ」『プレヒトの映画演劇論』河出書房新社、二〇〇六年、二九三―三〇一頁
- (7) 古川柳子 (二〇一四) 「メディア表現における『枠組』デザインの可能性」『芸術学研究』第二四号、二〇一四年六月、明治学院大学、四五―五六頁
- (8) 一九九七年に津田正夫、平塚千尋らがPAC調査団を組んでアメリカのパブリック・アクセス状況を調査し、その報告を『パブリック・アクセス 市民が作るメディア』リベルタ出版を一九九八年に出版している。
- (9) 平塚千尋 (一九九八) 『日本型PACのルーツをたどる』『パブリック・アクセス』リベルタ出版、一六〇―一七〇頁
- (10) 山田晴通 (一九八八) 「CTV自主放送のルーツ」『総合ジャーナリズム研究』二五、四四―五三頁
「特別企画」『ケーブルテレビ 初の「自主放送」始末』『CATV Now』第二二号、一九九三年九月、一四―一九頁
- (11) 情報ジャーナル社編集部 (一九七二) 「情報コミュニケーションの誕生・こちら下田CATV」四頁
- (12) 平塚千尋 (一九九八) 『日本のパブリックアクセス』『パブリック・アクセス』リベルタ出版、一七七―一八六頁
- (13) 福岡県以外でレギュラー放送の中で中継出演した住民ディレクターの居住都道府県は、熊本県、大分県、兵庫県、京都府、東京都、神奈川県、千葉県、岩手県、北海道など。
- (14) 黒田官兵衛の孫黒田忠之の愚政を、栗山善助の息子大膳が再三諫めたことによる関係悪化が原因とされ、三大お家騒動の一つといわれる。君主に対する反逆の罪を覚悟した大膳の直訴により黒田藩取り潰しは免れたが、大膳は奥州盛岡に配流され生涯を終えた。
- (15) 東峰テレビ制作「NHK大河ドラマ追走！二六時間テレビ」説明資料より。
- (16) 視聴者の視聴のためではなく、制作作業の中で使用する回線を目指すテレビ業界で使われる用語。
- (17) 水越伸 (二〇一三) 「形態学からデザイン論へ——メディア論の再検討と提言——」『国語科教育七二号』、全国大学国語教育学会、八一―八二頁
- (18) インターネットにおける表現の生成プロセスに焦点し、生命システムと結節させながら論じているものとしては、ドミニク・チェン (二〇一三) 『インターネットを生命化するプロクロニズムの思想と実践』青土社があげられる。
- (19) Bertalanffy, von Ludwig (1968) *General System Theory* 『一般システム理論』長野敬、太田邦昌訳、みすず書房、一九七三年、二八―二九頁
- (20) Bertalanffy, von Ludwig (1968) 前掲『一般システム理論』一六頁
- (21) Luhmann, Niklas (1996) *Die Realität der Massenmedien* 『マスメディアのリアリティ』林香里訳、木鐸社、二〇〇五年、九頁
- (22) Luhmann, Niklas 前掲『マスメディアのリアリティ』二六―三三四頁
- (23) Luhmann, Niklas 前掲『マスメディアのリアリティ』二二―二三頁
- (24) Bertalanffy, von Ludwig 前掲『一般システム理論』七頁